

「神の御業を見た人達」

結婚式とは、神の御前で新しい人生を夫婦として出発しようとする新郎新婦を皆でお祝いする時です。この門出は特別なひと時で、その喜びは今も昔も同じです。今から2000年前、ガリラヤのカナという地でもこの婚礼が執り行われていました。

1 三日目にガリラヤのカナに婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた。3 ぶどう酒がなくなったので、母はイエスに言った、「ぶどう酒がなくなってしまいました」。4 イエスは母に言われた、「婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません」。5 母は僕たちに言った、「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」。6 そこには、ユダヤ人のきよめのならわしに従って、それぞれ四、五斗もはいる石の水がめが、六つ置いてあった。7 イエスは彼らに「かめに水をいっぱい入れなさい」と言われたので、彼らは口のところまでいっぱいに入れた。8 そこで彼らに言われた、「さあ、くんで、料理がしらのところに持って行きなさい」。すると、彼らは持って行った。9 料理がしらは、ぶどう酒になった水をなめてみたが、それがどこからきたのかわらなかったので、（水をくんだ僕たちは知っていた）花婿を呼んで 10 言った、「どんな人でも、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったころにわるいを出すものだ。それなのに、あなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました」。11 イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。そして弟子たちはイエスを信じた。12 そののち、イエスは、その母、兄弟たち、弟子たちと一緒に、カペナウムに下って、幾日かそこにとどまられた（ヨハネ 2章 1節—12節）。

今、読みました出来事はガリラヤ地方の田舎町、カナという町で起きた出来事です。この町に結婚式があったというのです。そして、その婚宴にイエス様も母マリアもイエス様の弟子たちも招かれていたというのです。

しかし、そのお祝いの席で問題が起きました。婚宴の席で欠かすことのできないブドウ酒が底をついてしまったのです。現代なら代わりになる飲み物は、ちょっとリッカー・ストアに行けば、いくらでも補充することができます。しかし、当時はそういうわけにはいきませんでした。

さらに当時の婚宴は一週間ほど続いたといわれます。生涯一度のその大切な場所で、その一週間、訪問客を楽しませ、もてなすということは、新郎新婦にとって二人でする一番最初の共同作業でありとても大切なことでした。その間に飲食が尽きてしまうということは、訪問客に対しての無礼となり、とても恥ずべきことでありました。この婚宴では、その最悪の事が起きてしまったのです。

2018年11月4日 「神の御業を見た人達」

おそらくイエス様も母マリアもこの家と何かしらの関係があったのではないかと思います。特にマリアはこの家族のために、陰で色々なことをして協力していたと思われ、その時、彼女はブドウ酒がなくなってしまったことに気がついたのです。

マリアは母として、息子イエスを身近に頼もしく見てきたに違いありません。そして、その頼りがいのあるイエスなら、この困難な状況に対処してくれるに違いないと思ったに違いありません。ゆえにそこで働いていた僕に言ったのです「この方が、あなたがたに言いつけることは、何でもしてください」。

それに対して当のイエス様は僕達に言ったのです「かめに水をいっぱい入れなさい」（7）。そこにはユダヤ人のきよめの慣わしに従って、4、5斗も入る石の水がめが6つ置かれていました。

ここには「斗」という、私たちが使わない数量が書かれていますが、4、5斗というのはだいたい30ガロンだといわれています。あの一ガロンの牛乳パック30個分です。そのような瓶が6つあるというのですから、全部で180ガロンです。これは相当の量の水だと思います。

当時は言うまでもなく水道もなければ、ホースもない時代です。井戸からか、泉からか、水をすくい、そして瓶に移したのでしょう。一ガロンの容器で、水を入れることになると180回、水を瓶に注がなければなりません。これは相当の重労働です。

僕達はブドウ酒がなくなりつつあることにより、慌てる料理頭の姿というものも見ていたと思います。すなわち、彼らは婚宴の席で不足しているのは、水ではなくてブドウ酒だということを知っていたのです。しかし、イエス様はそんな彼らに「水を口いっぱいに入れなさい」と言われました。

一ガロンの水ならまだしも、180ガロンもの水を瓶に入れなければならない。僕達はそれがどんなにシンドイ仕事であるかを知っていたと思います。さあ、彼らはどうしたのか？彼らはその言葉に従い口のところまでいっぱいに入れたのです。

彼らはイエス様の言葉に従ったのです。そして、料理頭の所に口まで水でいっぱいになった瓶をもって行き、彼が瓶の水をなめてみると、それはブドウ酒となっていたというのです。しかも、今まで出していたものよりも良質のブドウ酒だというのです。料理頭ならブドウ酒がどこで入手できて、どのブドウ酒が美味しく、値段はいくらということまで知っていたと思います。しかし、そんな彼もこのブドウ酒がどこから来たのかが分からなかったというのです。

2018年11月4日 「神の御業を見た人達」

私達は思います。どう考えてもこんなことはあり得ないと。「あり得ない」ということは、すなわち私達の知識、経験に照らし合わせてみて、これは起こりえないということです。

しかし、私達はここでよくよく考えなければなりません。神とは人知を超えたお方であるということ。人知を超えたお方であるゆえに、私達はその存在を神と呼ぶのです。

聖書には色々な奇跡が書かれています。ですから「キリストの教えは素晴らしいけれど、どうもあの奇跡だけは受けつけられない」。そう思われる方は多いと思います。

しかし、どうぞお心におとめください。聖書はその見開きのページ、一番最初に『はじめに神は天と地とを創造された』（創世記1章1節）という言葉と共に始まっているということ。このことがまず大前提としてあるのなら、水がブドウ酒になるということは私達には到底信じ難きことですが、神にとりまして、このことは別に特別なことではないのです。私達の頭の中に収まりきれないからと言って、それを否定するのはおかしい話です。

しかし、そうであるのなら、同時に私達はこうも思います。「水を汲み、それで瓶を満たさない」などと言わずに、なぜ人知を超えた力により空の瓶に、最高のぶどう酒を満たさなかったのだらうかと。180ガロンの水を入れるなどという苦勞極まりないプロセスをスキップして、瓶にぶどう酒そのものを満たせば済む話でしょう。

しかし、イエス様はあえて時間と労力を必要とする方法をとられました。先々週もお話ししましたように、神様はプロセスを大切にされるお方であることがここにも明らかにされています。そう、イエス様はその御業を成すために、たとえ手間がかかったとしても、そのことを人の信仰に基づく彼らの働きと共同して成すべきこととされたのです。

時々、私達はこのことを忘れます。椅子に座ったまま、何もせずに神が最善をしてくれると言います。神は確かに最善を成して下さるお方です。しかし、それは私達が信仰と共に成す最善と共に成就していくのです。ローマ8章28節はこのことを明確に言っているではありませんか。

『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている』（ローマ8章28節）。神は私達と共に働き、万事を益として下さるのです。神は私達とともに働かれることを望んでおられるのです。

この僕達は名前も記されていません。ただ彼らはイエス様の言葉に従い仕えたのです。もし、この僕達がイエス様の言葉「さあ、汲んで、料理がしらのところに

2018年11月4日 「神の御業を見た人達」

持って行きなさい」に従わなかったらどうだったでしょうか。その可能性は十分にあったことでしょう。なぜなら、イエスの言葉は明らかに無駄のように思えるのですから。

しかし、僕は従ったのです。彼らにとって、それは意味のないことに思えることでした。徒労に終わるようなことでした。私たちは自分の頭で理解できること、採算が取れそうな、私達自身も願っている命令であるならば喜んで従います。しかし、その命令が自分の願うことではないとするならば、それに従うことは難しいのです。そして、大抵の場合、私達はそれに従うことはありません。

イエス様はマタイによる福音書5章47節で「兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんの優れた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか」と言っていますが、この言葉は言い換えれば「あなたが願っていることをしなさいという命令に従うことは、当たり前なこと、そんなことは誰でもしている」ということになります。

私は明らかに「このことをこの方は心から願っているんだろうな」と思われることに対して「これは神様のみ心だと思いますから従います」というような報告を聞くことが度々、あります。

しかし「このことは私の願っていることではないのですが、神様のみ心はそちらにあるようなのです。だから、従います」という言葉は、ほとんど聞くことがないのです。

そして、この二つの事の成り行きと結末を見る時に、不思議なことを発見します。それは「自分の願っていること」こそが「神の御心だ」としている方達は自分の願っている道を選んでいるはずなのに、どうもその歩みがなかなか進まないということがあるのです。

それに対して、たとえ自分の願う道ではないけれど、神様のみ心だということを示されて、そこに向かって歩き始めている方達に、当初は全く想像もしなかったような、神様の御業を見させていただくことがあるのです。

このことは自分の願いがあまりにも強いと、神の御心を聞き逃してしまい、神の御心をも自分の決断を後押しするものとして利用してしまうことを私達はしてしまうということを示しています。

私達にとりまして「主の御心」とはいったい何なのでしょう。か。「主の御心」とはいつも私達の願いと合致するものなのでしょう。それとも私達は「自分の願い」を「主の御心」と言い代えて「お墨付き」をいただこうとしているのでしょうか。このことはいつも私達に問われることなのです。

さて、それではなぜ、たとえ自分の願いとは異なることであっても神に従う者の中に主は恵みと祝福を注がれるのでしょうか。なぜなら、それが聖書の約束だからです。

イエス様はマルコによる福音書8章34節―37節で言いました「誰でも私についてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか」（マルコ8章34―37）

イエス様は言いました。私について行こうと思うものは、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。ここにはっきりと「私に従え」と書かれています。そして、この言葉を前に私達はしり込みします。「自分を捨て?」「自分の十字架を負って?」私達はこれらの言葉から自分の主体性を失い、あたかも洗脳されかたのように、あるいは歯をくいしばって、どうにかこうにか神様に従う者達をメージします。

しかし、イエス様は「いいや、そうではない」とこの後に言っているです。「自分の命を救おうと思う者は、それを失い、私のため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救う」。これを本当にシンプルに言うならば、「自分の思うがままに生きるのではなく、私に従ってくるのならば、あなたがたは自分の命を救うことになる」ということです。すなわち、その生き方こそがあなたにとって最善の生き方なのだということなのです。

今日、見ております僕達はイエス様の言葉に従い二つのものをそのためにささげました。そうです、自分の「労力」と「時間」です。6つの瓶に水を入れるということは、それなりの時間と労力が必要だったことでしょう。僕達はそれを捧げたのです。

私達は「手に入れること」、「与えられること」を願います。「してもらふこと」、それに多大な関心をよせます。そして、これらのことだけに思いが向いていきますと、「与える」などということは考えられなくなります。

しかし、聖書は言っているのです「受けるよりは与える方が幸いです」（使徒行伝20章35節）。これは私たちに対するチャレンジングな言葉です。なぜなら、私たちはどれだけ手に入れたか、どれだけしてもらえたかが、自分の幸福度を計るバロメーターなのだ信じて追求している世界に生きているからです。しかし、イエス様は「そうではない、与えることがあなたを幸福にする」というのです。

与えるということは物理的には自分のもとから、何かが手放されていくことです。それが物であっても、労力であっても、時間であっても、確かに私たちの元から何かが外に出て行きます。しかし、イエスはそれが幸いなのだということなのです。

そして、さらにイエスは驚くべきことをルカによる福音書6章38節に書いています「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたの懐に入れてくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるであろう」。

与えたことは、結局、自分に返ってくるのです。自分が量っている量りで、量り返されるからです。与えれば与えるほど富んでいく世界です。神様のために、本当に自分を捧げていくなれば、神様は祝福してくれるのです。これが祝福された生涯の秘訣であり、それは全く持って不思議な世界です。しかし、信仰を持つということは、そのような世界を垣間見させていただける特権に預かっているということなのです。

今日、お話ししていることはイエス・キリストの生涯、一番最初になされた奇跡です。ヨハネはあえて、この記事で11節で「最初のしるし」と言及して記録しました。その奇跡は婚宴という喜びの場で、その喜びが途切れることのないためになされた奇跡です。

すなわち、そこには「イエス様と共に生きることは喜びなのだ」というメッセージがあります。味気のない水が最高のワインになるということ。すなわち、それは味気のない人生だったものが、イエス様と共に歩いていくときに、味わい深い人生へと変えられていくというメッセージなのです。

そして、その時にその喜びを知ったのは水をくんだ僕たちでした。水をくんだということは、イエス様の言葉に従ったということです。自分にあるものをイエス様に捧げたということです。その彼らだけが、どうして水がブドウ酒となったかを知ることができたのです。

人それぞれ、どんな生涯を送るかということはその人にかかっていますし、それぞれの人生観は異なります。しかし、この僕のように神のみわざを見させていただけるような人生を送りたいと私達は願いませんでしょうか。運が良かった、悪かったというような人生ではなく、ああ、神はこのようなことを成してくださるのか、こんなこと考えたこともなかった。そのような神のみわざを垣間見ることができるような人生、それは何と素晴らしいものかと思えます。そのような人生は何によってもたらせるのでしょうか。「水をくんだ僕達は知っていた」という言葉がそのことを言い表しているのです。

ヨハネがなぜ、このことをあえてその書の一番最初に書き記したのか。この出来事はヨハネ以外の福音書の記者は記録していないことなのです。この出来事はヨハネの生涯の証だったのではないのでしょうか。ヨハネは「主に従うことによって得ることができるものの価値とその喜び」というものをよくよく知っていたのではないのでしょうか。

2018年11月4日 「神の御業を見た人達」

皆さん、ご存知でしょう、このヨハネだけが十二弟子の中でイエス様の十字架の元にまで従っていったのです。そうすることによって、彼だけが弟子の中でイエスの十字架上での七つの言葉を聞くことが許されたのです。それは、他の弟子達は誰も経験することができない彼の人生最高の宝となりました。

その彼が自分の目で見た十字架上のイエス様の姿を思いながら、聖霊に促され、確信に満ちて書いたのがヨハネ3章16節です。「神はその一人子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」。この言葉は聖書の中で最も有名な言葉となりました。

今日、人は野球スタジアムでこの言葉を掲げ、ハンバーガー屋のソフトドリンクの底にもプリントされる言葉となりました。この確信に満ちた言葉は、イエス様の十字架を自分の目で見た者、すなわちイエス様の十字架のもとまで従ったヨハネに与えられた言葉だったのです。そして、この言葉が言わんとしていることは主イエスは父なる神の御心に従い、ご自身を捧げたゆえに私達は今、永遠の命を得ているということなのです。

「水を汲んだ僕は知っていた」。もし、私達もイエス様に従い生きるならば「本来、知りうることもできない驚くべき神の栄光を見ることになる、味気ない毎日に喜びが取り戻される」とこの言葉は今も私達に語りかけています。

私たちの人生はあとどれくらい残されているのでしょうか。その間に、主に従っていくということ、主のために生きること。私たちがそのような生涯に一步を踏み出だすのなら、私たちは神の御業を見ることになるでしょう。

お祈りしましょう。